

パーソナル・イズ・  
ポリティカル

— 日常の学としての社会学

落合 恵美子

おちあい えみこ

京都大学大学院文学研究科 教授

50 50 50 50  
0 50 50 50 50  
50 50 50 50  
0 50 50 50 50  
50 50 50 50  
0 50 50 50 50  
50 50 50 50

50 50  
50 50 50  
50 50  
50 50 50

4

2010.11.24

パネルディスカッション

「大学教育としての社会学」をめぐって

落合 恵美子

×

田中 耕一

×

奥野 卓司

×

安藤 文四郎



## 落合恵美子

おちあい えみ こ

京都大学大学院文学研究科教授  
専門：家族社会学・ジェンダー論

1958 年生まれ。

1987 年東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。

主要著書として『21 世紀家族へ—家族の戦後体制の見かた・超えかた（第 3 版）』（2004 年，有斐閣）、

『アジアの家族とジェンダー』（2007 年，編著，勁草書房）、

『歴史人口学と比較家族史』（2009 年，編著，早稲田大学出版部）、

*Asia's New Mothers: Crafting Gender Roles and Childcare Networks in East and Southeast Asian Societies*, (2008 年，共編著，Global Oriental).

50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50  
0 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50  
50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50

▶**司会** 皆さん、こんにちは。それでは定刻になりましたので、ただいまより関西学院大学社会学部創設50周年記念連続学術講演会／シンポジウムの第4回目を開催します。最終回の今回は2時間しっかりと時間をとりまして、2部構成で進めていきたいと思います。こちらのプロジェクターに映してありますように、まず第1部として1時間程度、京都大学大学院文学研究科の落合恵美子先生のほうから「パーソナル・イズ・ポリティカル－日常の学としての社会学」というタイトルでご講演をいただきまして、その後、1時間のパネルディスカッションというかたちで、安藤文四郎社会学部教授・50周年記念事業委員会委員長に司会をしていただきながら「大学教育としての社会学をめぐって」というタイトルで第2部を行います。

簡単にこの連続講演会／シンポジウムの趣旨を言いますと、第2部のテーマにもありますように、我々としましては、大学教育としての社会学というものが、この50年間、何を果たしてきたのか、そしてどのように社会の要請に答えてきたのか、またこれなかったのか、そして、これからの社会を占うときに社会学というものがどのように社会の要請に答えていけるのか、またどういう課題が今、我々の前に立ちはだかっているのか。そうしたことを中心テーマに置いて、これまで3回の講演会をしてまいりました。ですので、今回はまさに日常の学としての社会学という、

社会学の本質のところ、まさにそれが「パーソナル・イズ・ポリティカル」という言葉で言い表わされていると思いますが、そのような話を落合先生から聞かせていただいた後で、今後の大学教育ということについてしっかりと議論していく場を設けたいというふうに思っております。

具体的な進行ですけれども、この後、宮原浩二郎社会学部長のほうから挨拶をいただきまして、その後、もう一度、私のほうでごく簡単ではありますが、講師の落合先生の紹介をさせていただきます。その後、すぐに講演のほうに入りたいと思います。

なお、今日のこの一連の講演会には、情報保障としまして、手話通訳とパソコンテイクがついております。手話通訳者として、西宮市聴力言語障害者協会ろうあ部会のほうから森川まなみさん、北内悦子さん、宮垣祝子さん、古賀一江さんに手話通訳をしていただきます。パソコンテイクのほうは、関西学院大学キャンパス自立支援課のほうから三浦花音さん、古賀有紗さん、高内洋子さん、岡村翔太郎さんの学生によるパソコンテイクをしていただくことを、主催者の方からご紹介しておきたいと思います。両方ともよろしくをお願いします。

それでは、宮原学部長のほうから挨拶をお願いします。

▶**宮原浩二郎** それでは一言、ご挨拶申し上げます。

げます。

今日は社会学部の 50 周年記念の講演会／シンポジウム、4 回目の最後ということで、この 50 年の反省も含めて、少し長い時間にわたりますけれども、京都大学の落合先生をお招きしていろいろ考えていきたいというふうに思います。

一つ、先ほど司会の方からも紹介がありましたけれども、共通テーマとして「教育としての社会学」ということを掲げてやってきたわけですが、これ大学にとっても非常に重要です、それから社会学にとっても物すごく重要なことなのですね、教育としての社会学を考えるということは。ましてやこの関学の社会学の場合はもう決定的に重要なことでありまして、というのは、一つは皆さんご存知のように、関学の社会学部というのは非常に大きい。我々、メガ社会学部というふうに言ったりもしますが、非常に大きい。一学年の定員が 650 名です。単に 650 名という数字だけであれば、あるいはもう少し大きい学部もあるかもしれませんが、社会学科一学科で 650 名なのです。みんな社会学を中心にして関連のことを学んでいる。そういう関学ですので、教育としての社会学が非常に重要だということです。

もう一つは言うまでもありませんけども、我々の学部を卒業する学生は、今日はここに学部生も何人かいらしてますけれども、卒業したらみんな一般社会に出て行くわけですね。

結果として、大多数の卒業生は一般社会に出て行く。一般社会で民間の企業であるとか、官庁であるとか、NPO とか、そういうところで働くということです。確かに社会学部の場合、少しメディア関連の就職が多くて、メディアというイメージがありますが、実際の比率としてはほかの学部より多いですが、しかし就職先としては、関学であれば法学部であれ、経済学部であれ、総合政策学部であれ、各業界への就職者数はそんなに変わらないわけですね、社会学部であろうと。そういうなかでやはり学部の教育としての社会学というのはどうあるべきかというのを考えるというのは、本当に大事なことだと思います。

幸いにしてというか、これからいろいろ議論もあると思いますが、社会学の場合、ほかと比較するとおもしろいという声が、結構学生からあるように思うのです。つまりそれ自体が身近でおもしろい、興味がわくと。それはすごくいいことで、単に娯楽で消費するのではなくて、もう少し社会生活の足もとといますか、今日の落合先生のテーマで言えば「日常の学としての社会学」ということになると思いますけれど、足もととか当事者として社会を生きていくというか、そういう力というか、センスというか、そういうものを何か身につけることができれば良いな、学生が身につけることに貢献できれば良いなと常々考えているわけです。このあたりも含め

て、まず落合先生から、—これは出産、子育てですね、話の中心が—、そういうある意味で本当に社会生活の足もとだと思のですが、そういうところから始めて、その後のパネルディスカッションも含めて、いろいろと考える機会にさせていただけたらと思います。長くなりますけれども、本日の講演会／シンポジウムを最後までお楽しみいただきたいと思います。

▶**司会** ありがとうございます。

それでは、私のほうから講師の落合先生について、ごく簡単ではありますがご紹介させていただきます。

落合先生の専攻は家族社会学、ジェンダー論、特に歴史社会的な観点から研究に取り組み、近年では国際比較、今日のお話にもあるかと思いますが、国際的な比較という方法を使って、積極的な発言やご提言もされておられます。

ご経歴としましては、1980年に東京大学文学部社会学科卒業後、1987年同大学大学院社会学研究科博士課程を満期退学された後、同志社女子大学の助手、専任講師、ケンブリッジ大学客員研究員、その後には国際日本文化研究センター助教授等を経られまして、2003年から京都大学大学院文学研究科にお勤めであります。そして近年では、今日のお話でもご紹介があると思いますが、京都大学グローバルCOE「親密圏と公

共圏の再編成をめざすアジア拠点」の拠点リーダーとしてグローバルCOEを引っ張り、積極的に共同研究をされておられます。さらに、学問の世界だけでなく、より広い一般社会に対して、本日のお話にもあるように、出産・子育てというものが今どういう状況にあって、どのような政策が必要なのかということに関して、提言なども精力的になされています。最近ですと、昨日（2010年11月23日）の朝日新聞にもその関連の記事が載ってましたので、ご覧になった方もおられるかもしれません。今日のお話にあるように、また宮原学部長からも紹介があったように「パーソナル・イズ・ポリティカル」という視点から、まさに日常の学として社会学はどのようなことに取り組むことができるのか、そしてどのようなことを落合先生ご自身がこれまでされてこられたのかということ、ご本人の研究史も振り返りながらお話いただけるというふうに期待しております。

それでは落合先生からのご講演、よろしくお願ひします。

▶**落合恵美子** 皆様こんにちは。ご紹介いただきました落合恵美子です。

今日は関学の社会学部50周年という、非常に晴れがましいシンポジウムにお呼びいただきまして大変光栄に思っております。今日は「パーソナル・イズ・ポリティカル (The personal is political)」ということでお話し

ます。まず、この言葉を聞いたことがあるでしょうか？ 聞いたことがあるという方は、手を挙げていただけますか。そうですね、一割いらっしゃるかどうかというところでしょうか。そうですね、お若い方はかえってご存知ないかもしれません。この言葉は、1960-70年代に盛り上がりを見せた第2波フェミニズム運動のなかで使われた言葉です。「第2波フェミニズム」というと何だろうと思われるかもしれませんが、「ウーマン・リブ」は聞いたことありますか？ ある人、手を挙げてください。これはありますね。なんだか講演というより授業のノリになってきました。そのウーマン・リブと言われた運動が第2波フェミニズムなのです。フェミニズム運動というのは二つの波がありまして、一つ目の波が19世紀後半から20世紀の初めまで、これは参政権獲得を中心とした運動でした。それに対して1960年代から70年代ぐらいにまた山があったのですが、そのときはそういう公的な世界での権利獲得ということとは別に、日常生活、親密な関係のなかでの権力と

いうことを問題にしました。

このごろ、デートDV（ドメスティック・バイオレンス）とかいいますよね。普通に恋人としてつき合っている、そのなかに権力があるというか、やっぱり彼の嫌がることは言えないとか、拒否できないとかいうことがあるのかもしれませんが。どうしてそういうことになるのでしょうか。

例えば自己主張が強い女の子が嫌がられたりすることありませんか。最近はそのが好きという男性もいますけれど、でも自己主張をあまり強くされると嫌というような人といると、どうしてもやわらかく物を言うようになって、はっきり主張しなくなったりするかもしれません。そうしているうちに好かれたいと思ってるだけなのですけど、いつの間にか、どちらかの言うことが通り、もう一方はいつも何か我慢してるという人間関係が作られていったりします。まさにそういうことを、この第2波フェミニズムは問題にしました。それを一言で言ったのが、この「パーソナル・イズ・ポリティカル」つまり「個人的なことは政治的である」という言葉でした。「政治的」ということ、権力にかかわるという意味です。政治、広い意味での政権にかかわるような政治権力だけではなくて、日常のなかにもそういう力関係がある。それを問い直していこう、というのが、第2派フェミニズムの主張でした。

ここで考えておくべきことは、権力とは社



会的なものだということです。先ほども言いましたように、男の子に嫌われないような、いわゆる「女らしい行動」をとっていると、「自然に」自己主張が弱くなって、相手の言うことを聞くようになっていく、という構造があります。その女の子個人が気が弱いから、あるいは男性個人が横暴だからそうなるというわけではない。社会に「男らしさ」「女らしさ」というような規範があって、それに従っていきってしまう。そういう意味で、「政治的」ということは「社会的」とも言い換えられる。権力関係は社会的につくられているのです。

ということから、ジェンダーの問題を社会学として考えるということの意味が出てくるのです。今日のお話では、この言葉「パーソナル・イズ・ポリティカル」という言葉を特にジェンダーに関したことだけではなく、もっと広く社会学全般に共通する言葉として考えたいと思います。性にまつわることばかりではなく、私たちが日常で経験すること、パーソナルなことは常に政治的であり、社会的であるのです。そのことをわかっていく、読み解いていくということが社会学を学ぶということの一番のおもしろさであり、役に立つところではないかと私は思っています。宮原学部長がおっしゃいましたように、社会学教育の根幹と関わっていることでもあります。

さて、ここから、私自身の研究史を私自身の個人史と絡み合わせながらお話ししてみた

と思います。ちょっと恥ずかしいのですが、今にして振り返りますと、私は「パーソナル・イズ・ポリティカル」を地でいく研究をしてきたようなところがあるからです。私は私小説のような論文を書くと言われたことがあります。自分の経験を小説にしてしまうように、身の回りにあったことを常に論文にして今まで来ました。でも日常のことをただ書くのと、論文にして書く、社会学にして書くというのは、一味違うのですね。その一味というのはどんな感じかなというのを、お話しできたらなと思います。

では、恥ずかしながら個人史と研究についてお話をいたします。まず私は大学院生にお勧めできるような大学院時代を送ってないのです。私は大学院の修士課程を4年かかって修了しました。1年休学して、さらに1年延長して、ですから4年かかって修士論文を書いているのです、普通2年のところを。まあ劣等生ですよ。

どうしてそうなってしまったかという、修士課程2年のときに恋愛してしまいました、結婚してしまったのです。私は東京の大学に通ったのですけれども、彼氏が関西に就職が決まってしまうました。どうしようかなと思いました。新幹線代は学生や院生にはまだ高いですよ。それを払って会いに行くのかな。バスもあるけど。しかし、恋人同士でそういうことやってると、やっぱり周りの目がきつい。当時は今より、もうちょっとき

つかったかもしれません。でも結婚したら周りもそうやって続けるのを応援してくれるかもしれないから、もう結婚するしかないかな、みたいなことで結婚したのです。

しかし、先生に相談したら、大学院は休学しなさいと言うのですね。そんな最初から通い婚みたいなことで学業と研究、学業と結婚生活が両立するわけないから休学しなさいと言うのです。そんなものかなと思って休学したのですが、休学してる間にもたまにゼミに行ったりしました。そうしたら先生が私のことを「落合先生の奥さん」と呼ぶのですね。それまでの私の生まれた家の姓ではなくて、落合先生の奥さんと言われました。そうしたら、奥さんが何か趣味で大学院に来てるみたいに関心してしまいます。もう奥さんの地位があるんだから、特に就職もしなくていいだろうというふうに関心してしまいます。私は困ったなと思って、何とか「落合先生の奥さん」ではなくて、「落合先生」と呼ばれるようになりたい、無理かもしれないけどいつかそうなりたくて、臥薪嘗胆しておりました。

ところが、修士課程4年目に東京に戻ってきて、今度は京都に通いながら修士論文を書いてたところ、気がついたら妊娠してたのですね。間抜けですよ。こういう危機的な状況で。でもそのときは何かうれいような気がして、頑張れば両立できるような気がしました。もしもこれが修士課程の二年目ぐらいであったなら、研究もうまくいっていません

でしたから、とても書けない、産んで書くなどということは無理だ、とやめていたと思うのですが、妊娠したときには、もうだいたい修士論文の構想もできていましたから、これは乗り切れるのではないかと、健康さえ気をつければ乗り切れるのではないかと、思いました。

それで妊婦水泳に行き、体調を整えたりしながら執筆を終え、そうこうしているうちに、とにかく修士論文が通りまして、博士課程に入って、その一年目に出産しました。京都から東京への通学というのはずっと続けていまして、子供を連れて行ったりしていました。授乳してますから、子供を何時間も離しておけないのです。授乳中の母親と子供というのは自立した個体ではなくて、何時間かごとに必要とし合うわけです。結構大変だったのですが、何とかそんなことを続けていました。

京都で最初は孤独でしたが、女性学研究会というのと出会って、その仲間たちと研究会を重ねることが大きな支えになりました。大変なときは仲間が大事、ひとりでは頑張れないと思います。

修士論文は「出産の社会史」といいます。妊娠したから「出産の社会史」で書いたのではなく、「出産の社会史」を書いてたら妊娠しちゃったのですね。「出産の社会史」というのはどんな論文だったかという、歴史人口学と社会史を結合したような論文でした。どこが社会学だと言われるかもしれません



50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50  
0 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50  
50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50

が、社会学のいいところは何やってもいいということです。経済学や法学だったら、はみ出したらもうあなたは何学者ではないねと言われる。でも社会学者は大抵のことやっても、社会学やってきた、で済みます。

そこで見えてきたことが、その後の私の研究生活のモチーフになっていきます。近代以前の出産というのは、社会に対して開かれた出産でした。当時の絵などを見ますと、産婆さんが付き添っていますが、それだけではなくて近所の女の人も付き添っています。ヨーロッパの絵では、後ろのほうに占星術師がいたりします。占星術師が子供の運勢を見てるのです。日本では夫が立ち会ってることもありました。夫は昔、産室に入らなかったといいますが、非常に地域差があります。日本では入らないところもありましたし、入ったところもあります。男性がつわりになることもあったそうです。妻が妊娠している間に夫も気持ち悪くなるので、これを「あいぼ（相棒）のつわり」といいました。出産は女性だけに関わるのではなくて、女性だけがすることではなくて、夫も一緒になってする。それから社会の人がそれを見守る。そういうことだったのですね。ちなみに、この妻の妊娠中に気持ちの悪くなる男性というのは、今もいるそうで、アメリカで調査をしたそうです。

出産というのは、そのように女性ひとりがするものではなかったのですけれども、それがだんだん家族化し、個人化していきます。

近所の人が出産に立ち会うなんて、今はちょっと考えられませんよね。せめて家族ですが、この家族も来ないことがあります。近代医療のなかに取り込まれた出産では、妊婦ひとりが産室で専門家に囲まれて出産します。それはまさに個人化された出産です。出産というワタクシごとと今は思われていることが、少し前には社会的なこととされていた。しかしそれがプライベートなことになり、孤立していく。そういう基本的なモチーフを、私はこの研究から得たように思います。

私自身の出産のときは、もちろん夫に立ち会ってもらいました。日本では里帰り出産が多くて、妻の実家に帰って出産するというのがよくあるのですけれども、経験のあるお母さんに見守ってもらいながら産むので安心な反面、実家が夫と一緒に住んでる場所と遠いとき、夫はそこから阻害されてしまいます。赤ちゃんが産まれた後も夫は一緒にいられません。その後のことを考えるとこれではまずいのではないかと思って、私は無理やり京都で産みました。実家の母は子供が生まれてから少し手伝いに来てくれました。今でも夫と娘は仲よしで、最初の刷り込みって大事なと思ってます。

そうやって子供を産んだのですけれども、今度は育児が始まります。京都市内のそれほど価格帯の低いマンションに住んでいましたから、若い人が多くて子育て中の人も多かったです。だから本当ににぎやかで、マン

ションのなかに子育てネットワークがあるという感じでした。よくうちにも近所の子供が来てました。おむつはめた頃から来てるのですよ。お母さんが買い物に行くからと言って置いていったりとか、パチンコ行くからとか、そんな地域でした。だからうちの夫は、私もですけど、マンション中の子供のおむつをかえたことがあります。

そのうち、初めての仕事に就くことができました。兵庫県家庭問題研究所といいまして、今はもっと大きい組織のなかに入っていますが、県立の研究所です。そのころは家族社会学の増田光吉先生が所長をしていらっしゃいました。甲南大学の先生でいらっしゃいました。私はそこに初めて主任研究員ということので勤めることができました。でも主任研究員といっても非常勤です。だから今の非正規雇用からキャリアを始めるというパターンのはしりのようなものですね。1年契約でした。週3日勤務と言われましたが、まだ子供が2歳でしたから、兵庫県まで週3日は通えないと思って、週2日でいいですかと言ったら、給料を3分の2に減らされました。とはいえ、1年間で1冊報告書を出すというノルマは変わりません。だから3分の2の給料で報告書を出しました。

そのときに兵庫県からいただいたお題が「核家族の育児援助に関する調査研究」というものでした。これは後で『近代家族とフェミニズム』（1989年、勁草書房）という本の

なかに入れることになった研究なのですけれども、このタイトルをもらったときに、私、しめたと思いました。まさに今、私が直面していることだと。夫と2人でいるところに子供が生まれてきた。私の親戚は箱根の関から西にはいません。だから全くの孤立核家族です。そこで一体、どうやって育児をしていくのか。私が悩んでることをみんなに聞いてみようと思いました。

このあたりが「パーソナル・イズ・ポリティカル」型の私の研究なのですが、調査対象は自分で設定できるので、2歳児を持つ母親ということに設定しました、私自身がそうでしたから。2歳児の育児というのは、一番労働強度が高いと言われてます。子供がまだ寝てるころはそんなに大変ではないけれど、2歳といたらもう動き回ってますよね。しかし言葉はよく通じないから、子供がかんしゃくを起こしたりします。言ってわかるというのは、ちょっと違うのです。労働研究の人が子育ての労働を測ったところによると、2歳が一番強度が高かったそうです。その2歳児を育てながら2時間かけて兵庫県までお勤めをするようになった私。同じように2歳児を持つお母さんたちは、一体どうやって子育てをしてるのだろうかと思って、それを調査したいと思いました。

そして幾つかのことを発見するのですが、それではこちらをご覧ください[図-1]。これは調査結果ですけれども、育児をめぐる近

所づき合いと、都市部／郡部のどちらに住んでるかをかけ合わせたものです。本当にシンプルなクロス表ですけど、意外と傾向があるのではないですか。でもこれを最初に見たとき、えっと思いました。これは正しいのだろうか。都市部では大体毎日、育児をめぐる近所づき合いはしてる。でも郡部は「ほとんどない」が3割だと。常識として、郡部のほうが温かい近所づき合いがあるのではないかと、と普通は考えると思います。ところがこういう調査結果が出ました。

不思議だな、間違っただろうかと思ったのですが、そこでもう一つの表を作ってみて、もしかしたらと思いました[図-2]。これは世帯類型と、都市部／郡部の別です。郡部では夫方同居の家が半分以上ありますね、夫の親と一緒に住んでいるのです。ところが都市部では孤立核家族が3割を超えています。このとき私のやった工夫は、同居だけではなく、隣居と近居というカテゴリーを立てたということです。こうした分類は今では

よく使われてるのですが、そのころでは結構早かったのではないかと思います。自分の経験からいって、同居してなくても近くに親がいたらそれは助かるよ、という経験があったわけです。それで隣居とか近居、何分以内に住んでいるという項目を立ててみました。意外と都市部にはそれがあるのではないかと思います。しかしそれを除いても、孤立核家族が3割を超えています。それが都市部の状況です。そうすると、郡部では近くに頼れる親族がいるけれど、都市部では頼れる親族がない。そのことが、近所づき合いに関係してるのかなと考えました。

そしてもうひとつの表を出してみたのですね。家族類型と育児をめぐる近所づき合い、これを見るときははっきりします[図-3]。大体毎日、育児をめぐる近所づき合いがあるという人たちの割合は、孤立核家族とか近居とか、親もとに同居してない場合のほうが高いです、特に孤立核家族。それに対して、近所づき合いをほとんどしないという人は、同居の

**育児をめぐる近所づきあい×都市部・郡部**

	だいた い毎日	週2、3 回	月3、4 回	ほとんど ない	合計
都市部	136 (40.6)	96 (28.7)	45 (13.4)	58 (17.3)	335 (100)
郡部	27 (17.4)	42 (27.1)	38 (24.5)	48 (31.0)	155 (100)

図-1

**世帯類型 × 都市部/郡部**

	夫方 同居	妻方 同居	夫方 隣居	妻方 隣居	夫方 近居	妻方 近居	孤立 核家 族	合計
都市	67 (20.0)	12 (3.6)	32 (9.6)	23 (6.9)	62 (18.5)	23 (6.9)	116 (34.5)	335 (100)
郡部	83 (54.1)	17 (11.0)	13 (8.4)	7 (4.5)	15 (9.7)	9 (5.8)	10 (6.5)	154 (100)

図-2

場合に多いです。ご覧いただいている図では、特に注目していただきたいところを赤い色にしてあります。このように媒介する変数があったわけです。都市部には孤立核家族が多い、だから近所の人とつき合っている。郡部には夫方同居の世帯が多い、だから近所の人に頼むまでもなく、親や親族に頼ることで乗り切れている。こういう状況が見えてきました。

都市部の活発な育児ネットワークを確認したということが、この研究での思わぬ業績になりました。これはその後、ほかの地域でも追試されまして、横浜市についても矢澤澄子先生の研究でほとんど同じことをやっていたいて同じということが出ました。だから、普通の近所づきあいは郡部のほうが盛んですけれども、育児期の子供を抱えてるときの近所づきあいは都市部のほうが盛んだということ。それがかなり普遍的な傾向として見出せるということが、この時期にわかったわけです。その出発点は私が近所の人たちと子供の

預け合いとかをしていて、この項目を入れてみたらいいのではないかと調べて調査をしたことに始まっています。また、育児ネットワークは家族類型と関連するということが、それも調べることができました。これが最初の、あまり予期せぬ、でも割とおもしろかった結果でした。

それから、もう少しこれを発展させた研究をするようになりました。子育てネットワークの変容、1960年代と1980年代の比較です。この頃、「親はだめになった」ということがよく言われてました。近ごろのお母さんはだめになったねとか、自分ひとりで子供も育てられないで人に頼ったり、保育園に入りたいとか、これは偏差値世代だからだろうかとか、いろいろなことが言われました。反面、60年代の親はしっかりしていたと理想化するわけです。全般的に家族がだめになったということが当時よく言われてましたが、そういう家族危機言説の一環だったと思います。けれども、当時、本当に若いお母さんだった私としては、気が気ではありませんでした。世間でこういうことが言われている、私たちの世代ってそんなにだめになったのだろうか。でも、どうもそんな気がしない、そんな簡単なことではないような気がする。私はその理想とされる60年代と今(80年代)は何が違うのだろうかと思って、それを調べようと思いました。

どうしたかということ、1960年代に書かれ

	夫方同居	妻方同居	夫方隣居	妻方隣居	夫方近居	妻方近居	孤立核家族
だいたい毎日	20 (13.3)	3 (10.3)	14 (31.1)	13 (43.3)	29 (37.6)	17 (53.6)	71 (54.3)
週2、3回	45 (30.0)	10 (34.5)	13 (28.9)	7 (23.3)	28 (36.4)	9 (28.1)	28 (19.8)
月3、4回	36 (24.0)	5 (17.2)	10 (22.2)	5 (16.7)	6 (7.8)	2 (6.5)	18 (13.7)
ほとんどない	49 (32.7)	11 (38.0)	8 (17.8)	5 (16.7)	14 (18.2)	4 (12.5)	16 (12.2)
合計	150 (100)	29 (100)	45 (100)	30 (100)	77 (100)	32 (100)	131 (100)

図-3

た論文を端から読みあさりました。育児関係のネットワークというか、ネットワークという用語はまだそのころは使いませんでした。だれが育児に関わっているかに関する研究を読みあさりました。そうしてみると、いろいろとわかってくるのですよ、論文はこう書かねばいけないということが。読んでも調査の客観的な条件がよくわからなくて、どういう人を対象者としてセレクトしたのか、ある概念を使ってるがその程度をどのように測ったかということが意外と書かれていない論文があるもので、そうすると本当に何をやったのかが、分からないわけです。だから比較ができない。しかし、そんななかで比較可能な研究も幾つかありました。なかでも出色だったのが先ほど言いました家庭研の所長の増田光吉先生の論文と、それから家族社会学の大御所である森岡清美先生の論文で、これらの論文は完全に理解可能で再現可能でした。

それらを見てみると、こういうことがわかってきました。森岡先生の論文では、子供が幼いとき地域での社交性は低い。子供の年齢が上がっていくと社交性が高まっていく。そういうことが書いてあります。

ところが私は、これは本当だろうか、と疑問に思ったのですね、子供が小さいときはお母さんは家に閉じこもって子供と1対1で世話をしてる。子供がちょっと大きくなると、やっと外に出て行ける。これは世間のイメー

ジどおりではありますが、でも私自身の経験からいって、そんなことはしていただろうと思ったのです。ひとりで全部できるものではない。そこで、よくよくその調査のほかの表をじっくり見ていきました。そうすると、子供が幼いときには親族とよくつき合ってるということがほかの表に書いてありました。つまり子供が幼いときの60年代の親たちは、親族からたくさんの援助を受けていました。子供が大きくなっていくと、親族からの援助が少なくなって、むしろ地域の人と交流するようになっていきました。だからそういう意味では1980年代と同じです。親族か地域か、どちらからかサポートを得てるということは80年代と同じです。ただ、親族の強さが違う。60年代には80年代よりも強い親族ネットワークがあったので、60年代の家族は一見すると、家族・親族のなかですべてを賄ってるように見えた。それで地域の人と助け合ったりしなくても立派に家族で子供を育てたように見えた。しかしそれは、80年代よりも親族ネットワークが多かったからです。それだけのことではないか、と考えました。

これは増田先生の論文の表です。主婦が実家へ帰る頻度と、Neighboring = 地域づき合いへの態度との関係を見えています[図-4]。ここでも、実家によく帰る主婦は近所づき合いをあまりしないことが明らかに示されています。逆に実家にあまり帰らない主婦は近所

に対して好意的であるということが出ています。ここでも 1980 年代と同じ関係が見られます。

ただ、違うのはこれです[図-5]。これは森岡先生の研究を用いて諸ネットワークの相対的な重さをはかったものです。測り方については、いろいろと異論があると思います。しかしおもしろいのは、親が一番強力ですけれど、86 ですね、次にきょうだいが 71 という数値が来るということです。友人(70-63)や隣人(53)はそれよりも落ちてくる。このきょうだいの重さに関して 1980 年代に似たようなことをしてみますと、このきょうだいとの付き合いはほとんど出ません。はっきり言えることは、きょうだいが親に近いほどの役割を果たしているというのは 60 年代的な現象であって、80 年代にはなかったということです。なぜだと思いますか？ 答えは私が言ってしまいますね。人口学的な条件が変わりました。1960 年代の親たちは、私の親世代ですけれども、平均してきょうだいが 4 人

いました。男、男、女、女が平均だとして、姉妹で助け合えるし、それからお兄ちゃんのお嫁さんとも助け合えたりもする。4 人のきょうだいが助け合えたわけです。ところが 80 年代の親たちというのは、50 年代の後半以降に生まれた人たちです。日本できょうだいの数が激減するの何年代ですか。知らないですか。これはすごく大事なことで、1950 年代です。1950 年代に合計特殊出生率が、ジェットコースターに乗ったようにがくつと低下しました。この兄弟姉妹で助け合おうにも、いないのですよ、兄弟姉妹が。1980 年代の親たちはそういう状況になっていました。

このように人口学的な条件が非常に重要だということが見えてきました。ここにいらっしゃる方のなかで、1950 年代の半ばまでに生まれた方というのはいらっしゃいますか。それからここにいる学生さんたちのなかで、おとうさんおかあさんが 1950 年代の前半生まれの方はいらっしゃいますか。1950 年代

Neighboringに対する態度別に見た主婦が実家へ帰る頻度(年間回数)  
増田1960

	0	1-2	3-4	5+	不明	合計
好意的	20.1	45.5	6.0	27.3	1.1	100
中立的	10.0	45.1	15.3	27.7	1.8	100
否定的	8.9	41.5	7.3	40.5	1.8	100

図-4

諸ネットワークの相対的な重さ  
森岡1968

- 親戚 親 86
- きょうだい 71
- 友人 70-63
- 隣人 53

- ゆききする親戚・友人がある主婦の率
- 友交点3以上の友人・隣人がある主婦の率

図-5

前半に生まれてる人が親だと、都合の悪いことがあるのです。私が経験したことですけれども、私にはどうしてもできないことが、親世代はいとも簡単にできるのです。

例えば、これは自分の親ではなく、夫の親の話ですが、私が実家に帰りすぎると、よく文句を言ってました。「今のお嫁さんたちはご実家に甘えすぎるわよね。私が若いころは実家に帰れるのは年に2回。盆と正月。それも両方帰れた年なんかありません。どっちか1回でした」そのように言われたのですね。私は、あれ、おかしいなと思いました。私は一人っ子です。私が帰らなかつたら親はいつもさみしい思いをするわけです。ですから、東京に行ったときなど、寄れるときは顔を出さようにしていました。

では、どうしてお母さんは実家に顔を出さなくて済んだのだろうと思ったら、お母さんには5人のきょうだいがあったということに気がついたわけです。その5人が取っかえ引っかえ訪ねていますから、親はさみしいということはない。ましてや同居のお兄さんがいて、そこにお嫁さんもいますから、小姑であるお母さんがしょっちゅう帰ったら、どっちかというとうるさいわけですね。つまり私たちより上の世代は、お兄ちゃん夫婦に親を任せるということができました。でも私たちの世代は、もうそれができない、田舎のお兄ちゃんはもういない、という世代だということに気がつきました。この人口学的な要因はとて

大事です。1950年代より前に生まれた方は、ご自分のできたことが若い世代にもできると思わないでください。1950年代以前生まれの方々は、非常に特別な人口学的な条件を持っていて、ある意味ラッキーだったのです。ですから同じことは子供たちにはできないと思ってあげてください。というようなわけで、私は姑さんに何か言われては人口学を考えて、というふうにして、論文を書いてきましたので、「お母さん、ありがとう」ということで、今は仲よくやっております。

人口学的な要因は、子育てのためのネットワークにも大に関わっていました。1980年代の親がだめになったのではなく、きょうだいの数が減っただけなのだとということがわかったのです。きょうだいの数が減ったら何をしなければならぬかという、近所の人とつき合うしかありません。親族ネットワークと近隣ネットワークを足して一定とまでは言いませんけれども、相補的なものです。ですから親族ネットワークが弱くなった時代だからといって別に嘆くことはなくて、ほかのネットワークを活性化すればいいのです。近所の人と意識してつき合うということ、80年代以降の親たちには勧めていけばいいのだということになります。

そこでこの時代には、そういうことが政策的にも提言されました。私たちの世代の研究者たちが提言していったということもありますし、お役人にもこうした研究が使い道があ

ると思われたのですね。「1960年代に戻れ」ではなくて、時代に合った政策が必要ということですね。

その後の研究の話に移りましょう。このように日本の子育ての状況を調べまして、60年代と80年代は違いがある、人口学的な差が重要だということがわかりましたけれども、そうこうしているうちに日本での育児ネットワーク研究がだんだん蓄積されてきて、大勢の研究者がこの問題を取り扱うようになりました。特に女性研究者が多かったです。女性研究者たちが自分の日常から出発して、この種の研究が随分と蓄積されてきました。2000年代になって、こういう研究をしてきた女性研究者たちがまとまりまして、国内を見ていると埒があかないのでほかの国を見たらヒントがあるのではないかと、アジアの人たちはどのようにこの問題を解決してるのか、これを調べてみようということになりました。

なぜアジアかということ、この頃までの社会学の比較研究というと、日本とアメリカを比べるとか、日本とヨーロッパを比べることが多かったのですが、そのような比較では、基本にある家の観念が違うのと、親族構造が違うので、こういう違いが出ますというようなことで終わってしまう。キリスト教と仏教が違うので、と言って終わってしまう。あまりに大雑把ではないですか。最初からそれが違うのはわかっていたことですから。こ

れではちゃんとした比較にならないのです。条件が全然そろわないから。それでむしろ日本の周りの国々の人たちはどうしてるのかを比較しようと考えました。よい条件として、1980年代にアジアの周りの国が急速に経済成長しました。日本が1960年代に経験したような高度成長を80年代に周囲の国々は経験しました。それで1990年代とか2000年代に入るところには「アジアの近代社会」というものが幾つも成立していたわけです。もう20年前だったらこの比較は難しかった。近代化した国と伝統的なものを多く残した国を比較したら、近代化の程度が違うからですね、で済んでしまう。これではやはり比較としてはうまくいきません。しかし、90年代以降、アジアのなかでの近代社会の比較というものの土台ができていきました。それで私たちはアジアの国に繰り出していったのです。11人の日本人の研究者が韓国、中国、タイの4人の研究者と組みまして、中国、韓国、台湾、タイ、シンガポールを対象国として、そこで半構造化インタビュー調査を実施しました。幾つかの国では数量調査もしています。

この成果は『アジアの家族とジェンダー』(2007年、勁草書房)という本にまとめました。英語版もありまして、*Asia's New Mothers: Crafting Gender Roles and Childcare Networks in East and Southeast Asian Societies* (2008, Global Oriental) といいます。皆さんたち、どんな仕事に就かれるかわかりませんが



も、これは考えておいたほうが良いことです。何かを書いたり発表したりするとき、努めて英語でも出すようにする。そうすると急に外国の人たちとのコミュニケーションの回路が開けます、急に人間のつながりもできていきます。この研究は国際比較研究ですから、もともと英語で書かないと調べさせてくれた地域の人に還元することもできません。それもあって英語版も出しました。

では一体、ここで何が見えてきたのでしょうか。これが調査の最終結果です[図-6, p.105]。「子供のケアをめぐる社会的ネットワーク」の構造ということで、各社会の成績表のようなものをつくってみました。横に地域名、上に子供のケアの与え手が書いてあります。この表のくふうは「母親」という項目が入っていることです。最初は「母親」を入れないで作っていました。つまり母親が面倒を見るのは当たり前で、その母親への育児サポートの与え手を上に並べました。

ところが中国に行ったらはっと目が開きました。中国で「子育てと仕事の両立で悩むことはありませんか」と尋ねましたら、リタイアした後、二つ目の仕事をするか、子育てをするか、それは悩むところですという返事が返ってきました。つまり子育てはおじいちゃんやおばあちゃんの役割なのです、中国では。お母さんも、もちろん子育てしますが、主要にはおじいちゃん、おばあちゃんの責任。そういう返答を聞いていると、最初から母親

がいつも子育ての中心のはずだという枠組み自体に日本的な偏りがあったということがわかりました。国際比較研究というのは、こういうところが本当におもしろいです。私たちが当たり前だと思っていた先入観が裏切られる。これほどおもしろいことはありません、もう快感ですね。

もう一つの快感だったのは、女性労働力率です[図-7, p.105]。これを見ていただきますと、横軸が年齢、縦軸がその年齢層の女性がどのくらい働いているかという労働力率を表わしています。この黄色を見ていただきたいのですが、これシンガポールです。シンガポールは山がひとつだけで、ある年齢から下がっていく。これを日本の経験を前提にしてみると、ああ、そうか、結婚や出産で退職して、そのまま再就職しない社会なのだというふうにしかな見えません。日本だったら再就職のための二つ目の山があるけど、シンガポールは再就職をしないだけなのだ。そう見えますかこのグラフ、どうですか？ 何かおかしいでしょう。最初の山が下がっていくタイミングが遅すぎませんか。30代の半ばですよ。シンガポールも高齢出産になってます。しかし、こんなに遅くはありません。出産退職をしてるのだとすれば、日本よりもこの低下が遅いわけはありません。そうすると、これはシンガポールでは子供が小さいうちはお母さんは働き続けているということなのです。そして子供が小学校の上の学年ぐらいになると仕

事を辞めていくのです。これには驚きました。

実は私たちは、数量調査で失敗をしました。望ましい女性の人生の選択肢として、「出産して退職する」「結婚して退職する」「一生働き続ける」など、日本で定番になっている選択肢を並べたのですが、そのなかに「子供がほどほどの年齢になったら退職する」という選択肢を入れなかったです。だってないですから、日本ではそういう選択肢が。ところが、それが当たり前前の社会があるのです。イタリアなどもそうです。そこでシンガポールで聞いてみました。日本では「3歳までは母の手で」といって、幼児期こそお母さんが家にいるものですが、どうしてシンガポールではこうなのですかと。そうしたらシンガポールのインフォーマントは、「日本の人たちはおかしいですね。子供が小さいときにはだれが世話しても子供本人にはわからないでしょう。何でそんなことを気にするんですか。だからわかるようになったら、教育のために母親が家庭に入ればいいのです。」と言うのです。目からうろこ。このように国際比較をすると、私たちが当たり前だと思っている常識が意外と危ういということに気がつかれます。

それで、調査結果を比較した表がこちらです[図-6, p.105]。見ていただくと、A = 青い色がついてるところは非常によいということですが、青でも薄さがちょっと変わってますね、薄いところ (A-) は非常にあるとい

うなかでもちょっと責任が弱いといころ。だから中国の母親は薄いブルーにしたのです。それからこの緑色で示したB、これがその次ぐらいに重要であるということです。それからC = 黄色はイエローカードと思ってください。どうもこのカテゴリーはあまり役に立ってないのではないかと。日本の父親とかです。それでD = 赤色はレッドカードです。ここはもう全然役に立っていない。例えばタイでは施設保育は、公的な2歳半未満の施設保育が少なくとも調査時点ではありませんでした。日本では家事労働者がDです。これは例えばシンガポールを見てください、家事労働者Aですね。メイドさんが住み込んでいる家が結構多いです。17%ぐらいの世帯では住み込みのメイドがいます。どこの国の人だと思いますか。フィリピン人、インドネシア人が多いですね。そうなのです、外国人家事労働者の雇用がアジアの多くの社会では非常に広がっています。しかし日本では外国人家事労働者に、そういう資格でビザを与えることをしていません。これは先進国と言われる国のなかでは非常に珍しい例です。これだけ経済力があるのに外国人メイドを受け入れていない社会、これは非常に特異です。私たちはこのことにも気づかされました。今、ケアワーカーはフィリピンやインドネシアから入ってくるようになりました。そうですけれど、家庭にフィリピン人が住み込みでというような話、聞かないですね。でもこれは、シ

シンガポールでは当たり前ですし、台湾でもかなり当たり前です。台湾では、子供のケアより、介護、高齢者ケアのためにベトナム人、インドネシア人を住み込ませるとというのが普通のパターンです。

そうするといろいろな人権問題も起きて、一概にそれがいいとは言えないですが、しかし日本の現状を考えると、これはすごく特異な状況だということは知っておいたほうがいいでしょう。例えば、日本では今、医者不足ですね。一つの原因は、新卒の医師の3分の1は女性になっているからです。女性医師が家族と仕事を両立できないと、医師は減っていくわけです。そういうことでやめる女性医師がいると言ったら、ほかの国では、どこの国の人でも、信じられないと言います。そんな時給の高い人がなぜ自分の仕事をやめるんですか、時給のもう少し安い人を雇えばいいのに、と言います。日本はこの選択肢があまりありません。これは非常に変わった社会なのです。

ほかにこの表から見えることは、施設保育に関して中国やシンガポールがいい。女性の労働力活用を考えている社会では、施設保育がいいということが見えてきます。

さて、これでもうまとめに入っていきますけれども、このように育児についての国際比較調査をしますと、いろいろなことが見えてきます。施設保育が充実しているところ、それから家事労働者、外国人家事労働者を使っ

てることなどが見えてきます。全体的に中国やタイ、シンガポールなどでは、育児期に女性が就労を続けているのですが、こういう社会では育児ネットワークが充実しています。それに対して、年齢別労働力率がM字型になる日本や韓国では育児ネットワークが貧困です。日本では育児不安という現象、小さい子供を抱えて孤立感や漠然とした不安感を抱えてしまうという現象がありますね。育児ノイローゼで子供を虐待するとか、時々ニュースで報じています。ああ、こんなものなのだと皆さん思ってませんか。あれは日本だけの現象です。ほかの社会でこの現象を説明するのは難しい。そのぐらい、日本の育児は孤立育児になっています。それはまさに、ここで見たような育児ネットワークが日本では貧困であるということから来てるのですね。

この育児ネットワークの研究から、今度はケアレジームの研究へということで、現在は方向転換をしています。日本だけの研究で育児ネットワークを見ていくと、例えばメイドさんを雇うという方向は全然浮かびません。メイドを雇うという選択肢が日本にはないということが、日本家族のネットワーク研究からでは見えてきません。選択肢はどのように与えられるかということに、この種の研究は答えることができないのです。そこで私は家族社会学というミクロから出発する学問を、マクロから出発する学問、例えば福祉社会学のような分野と結合させて、ミクロとマ

クロの両方からこの社会を見ていく必要があるということを感じました。

ここに丸が四つある図が書いてありますけど[図-8]、これをケア・ダイヤモンドといいます。ウエルフェア・ダイヤモンドでもいいのですけれど。ダイヤモンドとは四角形という意味です。つまりトライアングル(三角)に1個足したものです。ウエルフェア・トライアングルというのは、福祉研究で有名なエスピン・アンデルセンも使ってる図式ですが、国家と市場と家族、それが福祉やケアの主な提供者であるということなのですが、それにコミュニティを加えて、ケアやそれから人々の福祉、つまり幸福の提供者には、この四つがあるという枠組みで見ていこうということにしました。こういうのがケアレジームとかウエルフェアレジームと言われる考え方です。

このダイヤモンドの型を決めるものとして政策が非常に重要です。それで各国のパターンを別の図に書きかえてみました[図-9~14]。内容は繰り返しになりますので、ただ図だけ見ていただきます。結構、国によってパターンが違います。上が国家、左がマーケット、下が家族と親族、右がコミュニティです。たとえばこの図は中国ですね、左側が子どものケア、右側が高齢者ケア。このパターンを比べていきます。シンガポールはマーケットが大きい。台湾は高齢者ケアにだけマーケットが大きい。なぜこうなるかという

と国の政策です。高齢者がいる場合は外国人メイドを雇いやすいけれども、子供の場合はよほど困難な条件がないと難しいなど、雇いにくいのです。シンガポールとの違いはそれ、国の政策なのです。マーケットセクターも意外と国にコントロールされている。日本では高齢者ケアについて、介護保険の導入により市場と国家がダブるになっていますけれども、これも政策の結果です。韓国では意外とコミュニティーケアを頑張っており、介護保険も導入しました。タイはどうもどの方法による解決も苦しいらしいというようなこともわかってきます。

このように私的な生活への注目、もっと言えば自分の身の回りの諸問題への注目から始めた研究ですけれども、結局は福祉レジーム、グローバル化のあり方など、大きな社会の枠組みやその変動にたどり着きました。国家やそれを超えるような広範囲の社会との関係で、私たちのパーソナルな生活は形づくられているからです。

そこで、そのような考え方を正面に出しまして、京都大学の社会学者や関連領域の研究者がつくる社会学環では、グローバルCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」を運営しています。ミクロとマクロの二つの領域は、相互に規定し合いながらともに変動するという枠組みに基づいています。家族研究、福祉国家論、それから国際移動の研究、このような研究はこれまでばらばらにな

50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50  
 0 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50  
 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50 50

されてきましたけれども、統合的に進める必要がある。そうしなければ私たちの日常生活、そこで直面する問題は解けないということです。

最後になりますけれども、私たちは今、このような概念図式でこのCOEを進めています[図-15, p.106]。親密圏も公共圏もともに再編成されている現在、特にアジアに拠点を置きながら、これからの私たちの未来がどうなっていくのか、どうしていくのがいいのか、そういうことを考えたいと思っています。

今日は私の個人史から始まるつたないお話

でしたけれども、おつき合いいただきましてありがとうございました。

▶司会 落合先生、どうもありがとうございました。

**子どものケアをめぐる社会的ネットワーク**

	母親	父親	親族	コミュニ ティ	家事労働 者	施設(3歳児 未満)
中国	A-	A	A	B	C (B for large cities)	A
タイ	A	A	B	B	B	D
シンガ ポール	A-	B	A	C	A	A
台湾	A	B	A	C	B	C
韓国	A+	C	B	B	C	C
日本	A+	C (B for dual-career family)	C (B for dual-career family)	B	D	C (B for dual-career family)

図-6

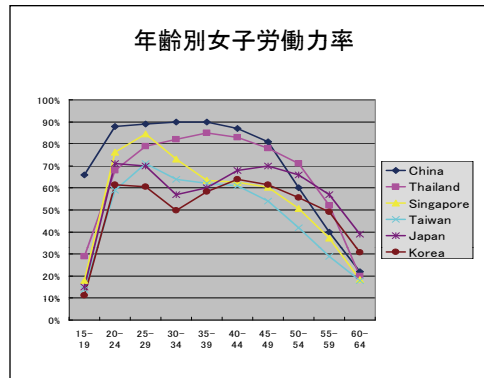


図-7

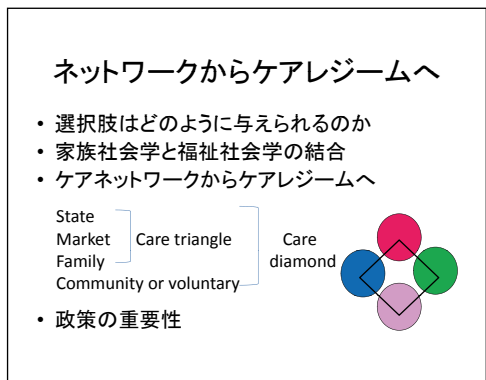


図-8

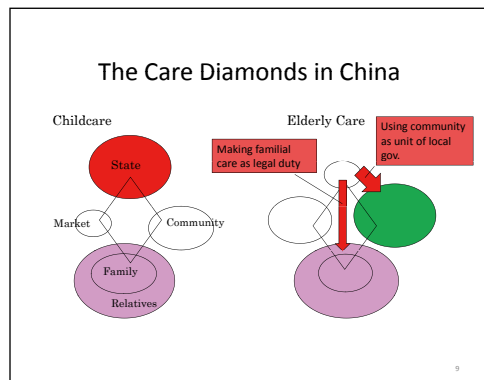


図-9

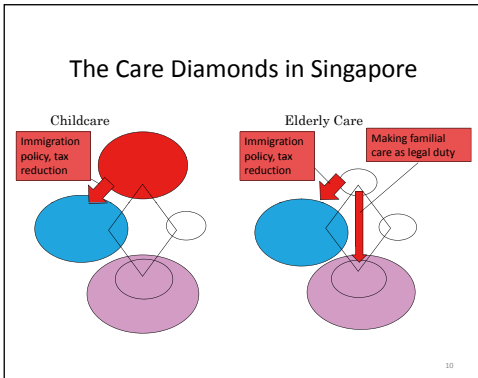


図-10

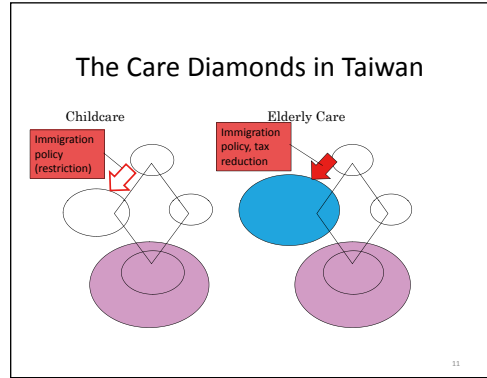


図-11

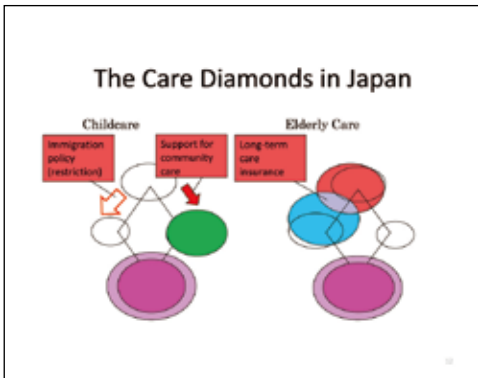


図-12

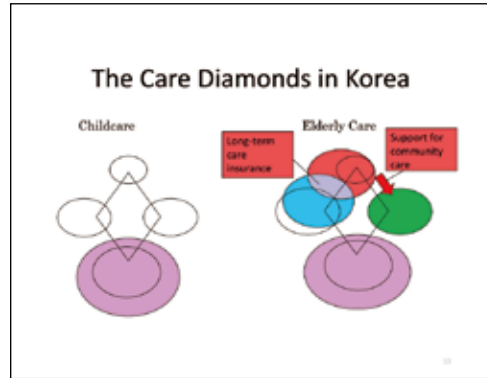


図-13

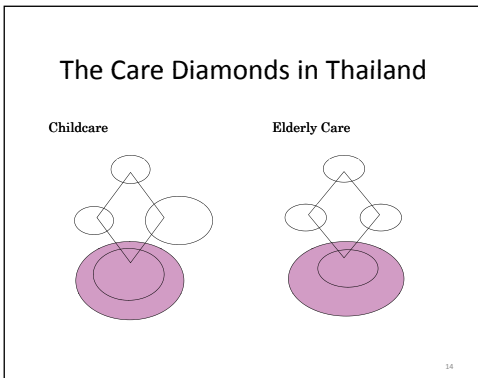


図-14

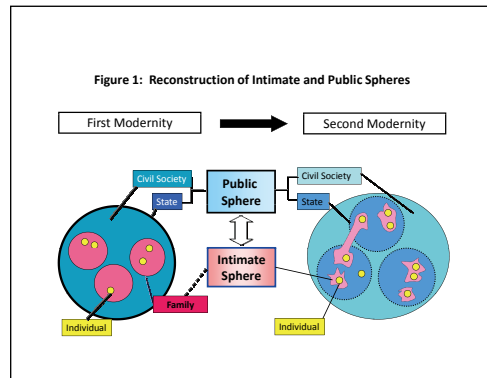


図-15